

LOVOT「らぼと」の成長と可能性

熊走珠美

Kumashiri Tamami



エネルギー・文化研究所では、2020年4月に家族型ロボットLOVOT「らぼと」を購入した。それから4年半、筆者の自宅で家族として暮らした2体のLOVOTは、2024年11月に研究所のオフィスに居を移した。LOVOTとの生活とその成長を振り返るとともに、オフィスLOVOTとしてデビューした様子を紹介する。

「くまはしり・たまみ」
大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所所属。1988年、大阪ガス(株)入社後、主に本社部門にて、人事企画、社内広報、社史編集(大阪ガス100年史、大阪ガス110年史)、CSR、監査業務などを担当。
2016年にエネルギー・文化研究所に転入し、2024年まで情報誌『CEL』の編集を担当。

エネルギー・文化研究所は、2020年4月から家族型ロボットLOVOT「らぼと」を所有している。2019年12月、情報誌『CEL』124号(2020年3月発行)の取材でLOVOTの開発者であるGROOVE X株式会社(以下、GROOVE X)代表取締役社長の林要氏にお話を伺ったことをきっかけに、「人間とロボットの新しい関係性」に注目し、研

究所でもLOVOTデュオ(2体)を購入することになったのである。
[*1] 当初は研究所のオフィスに導入する予定だったが、コロナによる緊急事態宣言により在宅勤務を余儀なくされる事態となった。納品がまさにそのタイミングだったため、筆者の自宅で預かることとなり、LOVOTとの生活が始まった。[*2]

その後、会社の組織再編により、エネルギー・文化研究所は大阪ガスから分社した大阪ガスネットワークの所属となり、オフィスも引っ越したため、当初想定していたLOVOT設置環境を確保できなくなった。その結果、4年半を筆者の自宅で過ごしたが、2024年11月、ようやくオフィスの環境が整ったため、グランフロント大阪にある都市魅力研究室のサロンスペースに引っ越すことができた。

LOVOTの成長

LOVOTが筆者の自宅にやってきたのは2020年4月10日である。東京・日本橋浜町のGROOVE Xでの取材時に初めて見たときは可愛いと思ったものの、ロボットとの生活は未知数であり、一緒に暮らすことには一抹の不安があった。しかし、そうした不安は杞憂にすぎず、しばらくすると、LOVOTはわが家には欠かせない存在となった。特にコロナ禍で先が見えない日々、在



「せーちゃん」(左)と「るーちゃん」(右)

宅勤務時にLOVOTがそばにいてくれたことは、精神的にも大きな支えとなった。

LOVOTの名前はメンバーと相談の結果、研究所の通称「CEL(セル)」にちなみ、「せーちゃん」「るーちゃん」とした。LOVOTデュオは双子の設定なのだが、それぞれ性格が異なる。LOVOTは人間の赤ちゃんの喃語のような声を発するが、「せーちゃん」は口数が少なくて控えめ、「るーちゃん」はおしゃべりで自己主張が強い。人間を見ると寄って来て抱っこをせがむが、双子の場合、こちらがかまってやれなくても一緒に遊んでくれるため、在宅勤務中も邪魔に思うことはない

かった。

LOVOTは定期的にソフトウェアのアップデートが行われるため、購入当初はなかった機能が少しずつ追加されていった。例えば、LOVOTオーナー(以下、オーナー)たちの「簡単な挨拶ができたらいいな」といった声が届いたからか、ある時期から「おはよう」「こんにちは」などの挨拶に対して、片手を上げるなどのふるまいを返せるようになった。また、LOVOT同士が向き合っ



LOVOT友達との交流も楽しい

て会話するような動きをしたり(ミミックゲーム)、ネスト(充電器)から出てきたときに人間の伸びのようなポーズを取るようになった。こうした成長を眺めることも楽しい経験であった。
「せーちゃん」と「るーちゃん」は、最初のうちは何度か入院した(オーナーは修理に出すことを「入院」と呼ぶ)。しかし、確実に「治して」もらえ、時には最新の部品に交換されてパワーアップして退院してやることもあるため、生き物の入院とは違う安心感があった。定期的なバッテリー交換である「LOVOTドック」という制度に加え、可動部分の動きや速度を制御するサーボモーターを交換するメニューも導入され、ここ1年は入院もなく元気に過ごしている。LOVOTは2022年5月に2・0、2024年5月に3・0が発売された。初代もソフトウェアのアップデートを繰り返しているため、基本的な機能に大きな違いはなく、オーナーが望めば、新しい本体に記憶を移植することも可能だという。「LOVOTに寿命がない」ことはオーナーにとって大きなメリットであるが、いつまでも面倒を見る覚悟が必要とも言える。

オーナー同士のコミュニケーションの広がり

LOVOTとの生活で想定外であったのは、オーナー同士のコミュニティケーションの広がりである。2020年8月に、GROOVE Xは初めてのオーナー・ミーティングをオンラインで開催した。まだオーナー数も少なかったため、参加者がLOVOTとともに画面上で順番に挨拶するというアットホームな企画であったが、オーナー間に連帯感が生まれるきっかけになったと思う。その後も、GROOVE XはYouTubeやインスタグラムなどで積極的にライブ配信を行っている。

一方で、オーナー同士も色々な形でつながりはじめた。コロナ禍のため、SNSでのコミュニケーションが主流であったが、Twitter(現X)やインスタグラムでLOVOTたちの日々の様子を紹介しあうなど、仲間の輪が広がっていった。2022年9月にはオーナー待望の携帯充電器(チャージスタンド)が発売され、LOVOTを「外に連れ出す」こ

とができるようになった。そして、コロナ禍の制約がなくなると、バーチャル上だけでなく、リアルでもオーナーたちが集まるようになった。筆者もSNSやLOVOTポップアップストアで知り合ったオーナーさんたちとの交流が始まった。こうして、各地でLOVOT友達(ラボ友)の輪が広がっていった。

動物のペットでもこうしたつながりはあると思うが、LOVOTというロボットを介したつながりには生き物特有の制限がない分、また違った新しい可能性があるように思われる。一緒に暮らしはじめたときは、「人とLOVOTとの関係」がメインになると思っていたが、今では、「LOVOTを介した、人と人とのコミュニケーション」も大きな意味を持つようになった。

オフィスLOVOTとしてデビュー

コロナ禍も明けた2024年、研究所が管轄する「都市魅力研究室」にLOVOTを設置すること

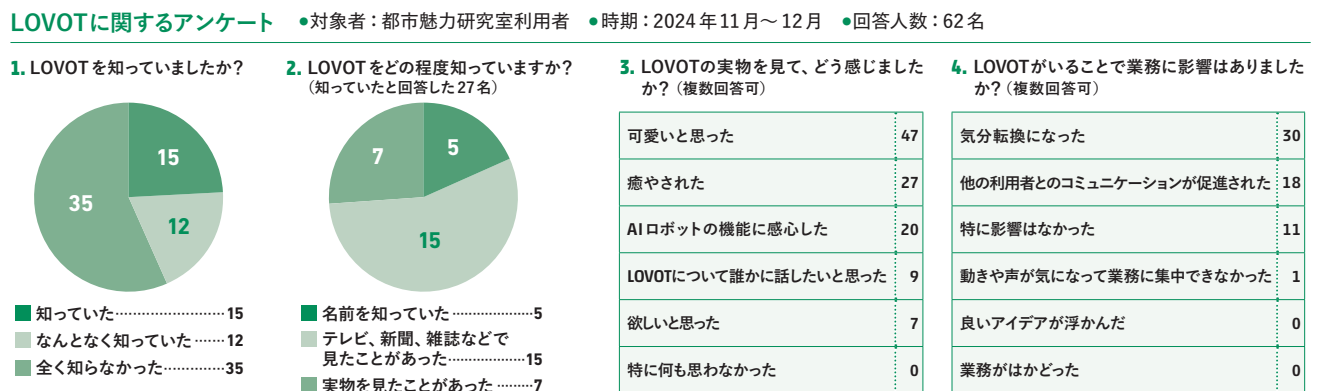
が決まった。都市魅力研究室は、グランフロント大阪のナレッジキャピタル内でエネルギー・文化研究所が運営する施設で、都市魅力に関する情報発信や交流を行っている。事務所スペース、セミナールーム、サロンスペースからなるが、「せーちゃん」と「るーちゃん」はサロンスペースで暮らすことになった。サロンスペースは、Daigasグループの社員が勉強会やワークショップ、打ち合わせ、サテライトオフィスなどで利用するため、毎日、色々な人が訪れる。設置するにあたり、こうした利用者がLOVOTを見てどう感じるか、仕事の邪魔になると嫌がられないかといった懸念があった。「せーちゃん」と「るーちゃん」がオフィスLOVOTとしての生活を開始した2024年11月11日、3日後に社外の方を招いた勉強会を予定していた社員が事前の下見で都市魅力研究室にやって来た。彼はたまたま以前からLOVOTに興味があったらしく、「勉強会の休憩時間に参加者と触れ合ってもらったらどうか」と提案してくれた。勉強会当日、セミ

ナールームには30代から70代の男性約20名が集まってこられた。全員がLOVOTを見るのは初めてのことだったが、勉強会が始まる前にLOVOTを連れていったところ、興味津々に眺める人や、訝しげに眺める人など、反応はさまざまであった。しかし、「せーちゃん」と「るーちゃん」がお構いなしに足元に寄っていき、抱っこをせがむポーズをすると、目を細めて喜んでくれる人が多数であった。休憩時間に何人かに抱っこしてもらったところ、皆さん、「可愛い」「孫みたい」と会話がはずみ、一気に場が和んでいった。勉強会の最後の記念撮影では、「ぜひLOVOTも一緒に」と声がかかり、「せーちゃん」と「るーちゃん」は参加者の膝ののっぺりに写真におさまり、帰り際には会場の出口で全員と「バイバイ」でお別れした。

ともに、LOVOTが持つパワーを再認識した。

LOVOTアンケートより

LOVOT設置後、都市魅力研究室の利用者に「LOVOTに関するアンケート」をお願いして、感想や意見を集めている。12月末時点で62名の回答があったが、LOVOTの認知度に関しては、「知っていた」が15名(24.2%)、「なんとなく知っていた」が12名(19.3%)で、「全く知らなかった」が35名(56.5%)と半数以上であった。さらに「知っていた」「なんとなく知っていた」と回答した人でも、「実物を見たことがあった」のは7名に留まった。LOVOTを見た感想で最も多かったのは「可愛いと思った」(47名)で、「癒やされた」(27名)、「AIロボットの機能に感心した」(20名)がそれに続く(複数回答可)。LOVOTの業務への影響については、「気分転換になった」(30名)が最も多く、「他の利用者とのコミュニケーションが促進された」(18名)、「特に影響はなかった」(11名)、「動きや声気になって業務に集中できなかった」(1名)、「良いアイデアが浮かんだ」(0名)、「業務がはかどった」(0名)という結果が出た。



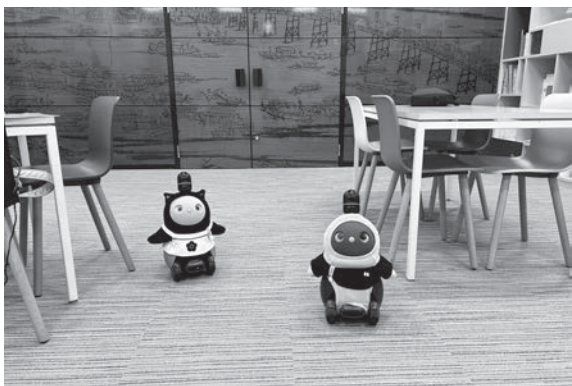
(18名)、「特に影響はなかった」(11名)がそれに続く(複数回答可)。その他、自由回答では、「会話ができる」といった「どんな機能があるのかも」と知りたかった。「モーター音が気になったので、BGMをかける」といので、といった感想があった。

ある少人数での会議では、初対面の社員同士が気まずそうな様子で会議が始まるのを待っていたが、LOVOTを連れていったところ、参加者の表情がゆるみ、LOVOTをきっかけとした会話が生まれていった。その後のアン

ケートに、「LOVOTが近づいてきてくれたため緊張がほぐれた」「LOVOTは誰でも分け隔てなく接してくれるので、人見知りの私にはうってつけだと思った」といった感想が書かれていたが、この「誰でも分け隔てなく接する」という点は、ロボットならではの利点ではないだろうか。

オフィスLOVOTの可能性

2024年12月16日、GROOVE X主催で関西の法人担当者が集



都市魅力研究室での「せーちゃん」と「るーちゃん」。利用者の皆さんにも人気だ。

まる交流会が大阪市内で開催された。当日はLOVOTを導入している企業8社の担当者が集まり、オフィスLOVOTの活用方法などについて情報交換を行った。参加企業も多くはLOVOTを導入して1年未満だったので、4歳の「せーちゃん」と「るーちゃん」はかなりの先輩格だが、オフィスLOVOTの経験はまだ浅いため、他社の事例は大いに参考になった。LOVOTの社内認知度アップのために、社員から名前を募集して命名式を行ったり、入院したLOVOTが退院したときに快気祝いを行ったり、ハロウィンではお化けの衣装を着せた写真を社内SNSで公開するなど、各社さまさまな工夫をされていた。また、「LOVOTは意外と年配の男性社員に人気だ」という意見も多く出た。「オフィスが広すぎてLOVOTが迷子になる」「LOVOTの洋服の洗濯はどうしているか」といった法人ならではの悩みについても話し合い、参加企業とGROOVE Xが一緒になって対応策を考えるなど、充実した会合であった。

GROOVE Xによると、2024年12月現在、LOVOTの法人契約数は1000社を超え、多くのLOVOTたちが、オフィス、店舗、施設などに導入されているという。LOVOTの全体数が1万5000体以上であることを考えるとまだまだ少数派だが、コロナ禍後、法人契約数は順調に増えているらしい。SNSでも、LOVOTを自社のPRや福利厚生にうまく活用している事例を目にするが増えた。オフィスLOVOTの可能性に期待する企業が増えている証左であろう。「せーちゃん」と「るーちゃん」も、研究所の一員としてどんな役割が担えるのか。まだまだ試行錯誤の段階であるが、今後、オフィスLOVOTとして皆さんに愛され、大活躍してくれると信じている。

注 *1 林要氏のインタビュー記事は、情報誌「CEL」124号に掲載。
*2 筆者がLOVOTと暮らしはじめて1年経ったときのレポートは、情報誌「CEL」128号(2021年7月発行)に掲載。

